ディルタイにおける「了解」と「構造連関」

森本　司

ディルタイの扱った問題は、至る所未解決のまま散在している。彼の死後、彼の思想を発展させた人々の活動により、ディルタイの先見性が明確になりつつあるが、ディルタイ自身において解決された問題、完成された著作は驚くほど少ない。『精神諸科学序説』（以後、『序説』と記す）は未完であり、心理学に関する論文は晩年顧みられなくなり、『精神諸科学における歴史的世界の構成』（以後、『歴史的世界の構成』と記す）も他の諸論文、他の草稿と密接に結びつき、それ自体で完結していない。彼の研究の内、理論的な部分は膨大な草稿中にある。最近、その中の一部が、ディルタイ全集第18巻、第19巻として刊行された。従って、彼の理論的な仕事に関する研究は、今のところ中途にあり、今後刊行され公表される草稿の内容によっては、ディルタイ研究が変わることも考えられる。だが、彼が公表した著作・論文において彼の思想の特徴を抽出し、それをもとに草稿との比較を行うことは重要であるから、公表された著作や論文において彼の思想の特徴を指摘し確認することが、今後の彼の思想的位置づけにも現代の思想的課題にとっても意義あることである。本論文は、ディルタイの思想の特徴が「了解」において顕在化していることを示し、今後の「了解」論の方向づけを行う。

1

ディルタイの「了解」概念には微妙な二重性があり、それが何に由来し、何をもたらすのか漠然としている。その二重性とは、「了解」が、一方では認識論的な問題に従属し、学問の方法であるとともに基礎づけの道具でもあり、他方では、「客観的精神」の世界に生きている人間の存在の仕方に関わる、[1]ということである。「個人が歴史を了解するのも、個人自体が歴史的存在者であるからである。」（VII, 151）と言われる場合にも、その二重性が現われる。このような二重性は、「体験」にも見られる。「体験」は精神諸科学における最も根本的な事実であり、しかも同時に「実在把握の形式」[2]と解される。「生が生をとらえる」（VII, 136）という表現から考えると、このような二重性は、精神諸科学における宿命であろうか。実は、このような二重性は我々の目に付きやすい氷山の一角であ

り、その部分を先鋭化することにより上述の認識論的、人間存在論的議論も可能となる。実際には、「了解」は二つの頂点の間に位置する。従って、本来の「了解」論はその間で行われなければならないが、本論文は、その二重性に注目し、その事態の分析を主とする。ただし、直接「了解」について議論を始める前に、「了解」の前提となる「体験」について簡単に触れ、これを基礎に置く。

「体験」とは「内的な」「構造的統一体」(VII, 25) のことであり、その基本的機能は「感知」(Innewerden) として示される。「体験」は「構造的統一体」でであるから、そこに全体と部分との関係があり(部分は部分同士相互に結びつきながら、全体とも緊密に関わり)、知情意の各要素が統一されている。しかも、「体験」はそれ自体で自らの内容を感じとる(「感知」)。「体験」の特徴とは、「常に自己自身を確信している」(VII, 26) ということである。ディルタイの心理学、すなわち、「記述的分析的心理学」は、このような「体験」を基礎とする。この心理学は、「内的経験の分析」(V, 320) として精神諸科学の基礎学の一方を担当し、他方は、「了解の分析」(a. a. O.) としての解釈学が担当する。[3]

2

解釈学において中心的位置を占める「了解」は、「解釈学の成立」という論文で明確に認識の問題に所属すると宣言されながら、ハイデッガーが『存在と時間』で展開した人間存在論的な性質を帯びている。つまり、一方の極では、認識論として、精神諸科学の認識の仕方と基礎づけのための認識の真理基準の問題に「了解」が関与し、他方の極では、客観的精神の世界における人間の存在の仕方と連関する。この「了解」の二重性は、先に述べたように、二つの極から見た「了解」の姿であり、実質はその中間にある。すなわち、「了解」が認識論的に考察されていても、人間存在論的問題が介入しなければならず、人間存在論的に考察されている際にも、認識論的問題が入りこまざるを得ない。「了解」における認識論的傾向の研究を、「了解」の認識論と呼び、「了解」における人間存在論的傾向の研究を、「了解」の存在論と呼ぶと、両者は本来交錯していなければならないのである。

二つの「了解」論の交錯の問題は、「相互作用」という舞台で顕在化する。自己と外界との、いわば、「同化」と「調節」[4]のごとき「相互作用」の幅は、きわめて広く解釈できる。ディルタイによると、「抵抗経験」と呼ばれる段階から学問的認識に至るまでの段階が「相互作用」という概念に含まれる。だが、ここでは、まず初めに「了解」が可能となる根拠を「構造連関」との関連で考察するため、「相互作用」における「了解」の作用について触れる前に、形式的な「了解」概念をディルタイの記述に従って述べる。

「了解」は、「人間の歴史において感覚的に与えられたものから、感覚には決して現われないが、このような外的なものにおいて現われ表現されているものに遡る。」(VII, 83) また、「了解が及ぶところでは、このような外的なものと内的なものとの関係だけが存在するのであって…」(VII, 83f.) という叙述から、「了解」は、「外的

なもの」つまり「感覚的に与えられたもの」から「内的なもの」すなわち「感覚には決して現われない」ものへ至る作用であることが分かる。従って、まず、「了解」は外→内という運動として規定される。また、「了解の形式。我々にとり部分として定められた個々の事物から全体を決定する連関を導く帰納」(VII, 225) という記述から、「了解」は個→全体という方向に動くことが分かる。さらに、「この方法（「了解」に基づく方法のこと―引用者注）は二重の方向に動く。個別に向かう方向では、個から全体へ、また逆に全体から個へ、そして一般的なものへ向かう方向では、一般的なものと個別的なものとの間に同じ関係が成り立つ。」(VII, 146) 以上の記述をまとめると、「了解」運動は、外→内、個→全体、個⇄全体、個別⇄一般、として規定される。これらは、部分と全体との運動にまとめられる。すなわち、◎部分⇄全体、①個→全体、②個⇄全体、③個別⇄一般、である。◎は、「了解」運動の基本的枠組であり、①は、「了解は常に個別的なものを対象とする」(V, 212) というように、「了解」はまず個物から始まることを意味している。②は歴史的研究において、③は一般的体系的理論において「了解」が作用している場合の動きである。そして、◎から③までの動きが、外→内という「了解」の動きの中で行われていると考えられる。

次に、「了解」の対象に観点を移すと、その対象が「客観的精神」の世界における個物であれば、それは「構造的」な連関が固定されたものであり、他人であれば、時間的制約はあるものの、「構造連関」の「表出」である。両者に共通していることは、それらが共に「構造的」な性質を帯びているということである。

そのことを示すために、「客観的精神」と「構造連関」との関連を考察する。ディルタイは意識における対象として、人とものを同列に置き、その対象はみな、我と汝のモデルから考えられている。「精神が客観化されたものはすべて、我と汝に共同のものをそれ自身の内に含んでいる」(VII, 208) そして、そのモデルの一般化により、「客観的精神」が規定される。「個人間に成立する共同性が感覚世界に客観化された多様な形式を客観的精神という。」(a. a. O.) また、「客観的精神」は、「種々の構造的連関における生の外化」(VII, 146) とも述べられている。従って、「我々は客観的精神を理性から了解することはできず、むしろ共同体においても受けつがれている、生の統一体の構造連関に遡及しなければならない。」(VII, 150) 以上から、「客観的精神」の世界は、「構造（的）連関」が感覚世界に客観化され固定されたものであり、「構造（的）連関」が拡大された世界であると考えられる。このことから、「了解」の対象が、人・ものいずれであっても、そこに「構造的」性質があると言える。

そこで、その「構造的」という術語の内容を把握するため、ここでディルタイの「構造」概念を略記する。ディルタイが「構造」を自らの論述の中心的な術語として明確に使用したのは、公表された論文では「記述的分析的心理学の構想」(以後、「構想」と記す) 以降であろう。確かに、ローディの指摘通り[5]、他に「構造」という語の使用箇所が、「構想」前にもあるが、まだ中心的な術語とはなっていない。ディルタイによると、「構造」とは、「諸過程が交代し、心的な構成要素が偶然並存し、心的体験が続いて起こる中で、個々

の心的連関を相互に関連させる諸関係の総体」(VII, 15) である。また、「心的生の構造」とは、「知情意の様々な過程が一つの連関に統一されていること」(V, 210) である。さらに、「心的構造とは、心的生の統一体において種々の機能が互いに結びついたものである」(VII, 131) と規定されている。つまり、ディルタイは、主体の内的状態における種々の機能の結びつきの総体を「構造連関」と呼ぶのである。心的状態が一時的に現われ、そして消え去るのに対して、「構造連関」は安定しており、時がたつと消えるということはなく、持続的な性質を持つ。

以上の「構造連関」に由来する性質を、「構造的」特性と呼ぶとすると、先述の「客観的精神」の世界における個物も人も、「構造的」特性を帯びていると言える。そして、その両者の間に「了解」が働いている。つまり、主体の「構造連関」と客体において客観化された「構造的」特性との間に、その両者をつなぐ橋のように「了解」が作用している。ここには、主客における「構造」上の「同形性」(Gleichförmigkeit) があり、それにより「了解」の可能性が保証されるのである。そのような「同形性」を、ディルタイは特に「同種性」(Gleichartigkeit) と呼ぶ。「同種性」の意味するところは、人間は皆同質であって、人間の個性は異質な要素によって決定されるのではなく、同質の各要素の強弱による、ということである。ディルタイによると、「個人が区別されるのは、質的な差異によってではなく、いわば個々の契機の力点のあり方によるのである。」(VII, 213)「つまり、同じ機能、同じ構成要素があらゆる個人のうちにあり、そして、それらの強度によって種々の人間の素質は区別されるに過ぎない。」(V, 334) このように、個人の個性が同質の要素の強度によって決まることを、ディルタイは「個性化の内的原理」と呼ぶ。

だが、同質な個物や人の間に「了解」が働くとは言うものの、それぞれに個性がある。その独特な個性に近づくためには、ある操作が「了解」に加わらなければならない。その操作は「転移」(Transposition) という術語で示される。通常、それは「投入」と訳され、リップスに代表される「感情移入説」と誤解されやすく、またディルタイ自身の記述の仕方にも、そのように解される箇所があるが、原理的には、彼が「解釈学の成立」で明確にしているように、「転移は変換 (Transformation) である。」(V, 334)「変換」とは、自己の個性を形成する各要素の強弱を変え、対象に「表現」されている内的なものに近づくことである。[6]

以上の考察から、「了解」は異質なものの間に生ずるのではなく、同質ではあるが、程度の差によって異なるものの間で、「転移」を起こすことによって可能となる、ということが分かる。つまり、根拠の観点から見ると、「転移」により可能となる「了解」の根底には、「構造連関」及び「構造的」特性がある。「この構造連関は『認識過程の根底をなす』ものである。」(VII, 13)

3

これまでは、「了解」の根拠としての「構造連関」について考察して来た。ここでは、「了解」と「構造連関」との別の関わりを、「了解」自体の働きから考える。すでに、形式的には、前に述べた

ので、以下はさらに、内容の観点から、「了解」について論述し、続いて、「了解」と「構造連関」との二重の関係について考察する。

「了解」の内容は、それだけで成立しているのではなく、「体験・表現・了解」の三者の連関が先に前提されているので、「了解」の内容に直接入る前に、その三者の関係から、「了解」内容に近づく。「体験と了解は、心理学的に見れば、常に分離している。それらは自己と他者の領域に属している。一方と他方それぞれの過程は、常に分かれているが、それらの間には構造的な連関があり、その連関に従って、他者の追体験は自分の体験との関連づけを通してのみ可能となる。」(VII, 315) また、「体験の表現が体験と、了解がその表現と構造的に関係する限り、精神諸科学の範囲に属する固有な形象が生ずる。」(VII, 318) 以上の叙述から、三者の関連が「構造的」、すなわち、知情意に代表される統一的連関であることが分かる。さらに、その三者は、「体験」されたものが、「表現」され、その「表現」が「了解」され、「了解」することによって「体験」が生ずる、という関係になる。その関係において展開される内的過程は、次のようになる。すなわち、「体験」において知情意(とそれに関連するもの。以下同様)として統一された内的なものが、「表現」においてそれと対応する知情意の統一体として固定され、そして、知情意の統一形成体である主体が、その「表現」の内に知情意の統一された内的な、精神的なものを把握し、つまり、「了解」し、その統一を「体験」として定着させる。従って、「了解」する主体と「了解」される対象(「表現」)は、「了解」を介して「構造的」に連関しているとともに、「体験・表現・了解」のそれぞれが、内部において「構造的」に統一されていることになる。

「構造連関」が知情意の統一連関と解されることは、先述した。だが、その統一は知情意の各要素にとどまらず、それらと密接に結びつく他の三つ組を内に含んでいる。知は、「対象把握」に示されるように、所与の把握を意味し、所与のあり方(全体における部分のあり方—「意義」Bedeutung)、つまり現実に関わる。情は「構想」では「構造連関」の中心に位置し、[7] 原動力となる。[8] さらに、情は、対象や自らの状態の「価値」と結びつく。[9] 意は、意図および目的と結びつき、その目的の実現のための努力を引き起こす。「なるほど、精神的物理的統一体がそれ自身の内でまとめられているのは、次のような点によってである。すなわち、この統一体にとりそれ自身の意志において立てられたものだけが、目的となることができ、それ自身の感情において与えられたものだけが、価値あるものとなることができ、それ自身の意識にとり確実で明白であると確かめられたものだけが、現実的で真理となりうる、ということによって。」(I, 30)

以上の「構造連関」の構成(実際には、さらに複雑な結びつきを伴うが)をもとに、「了解」概念の検討から明確になることは、「了解」の内容上の「構造的」特性と、その階層性である。以下に述べるように、階層は「了解」の内部に起こるばかりでなく、ある「了解」と他の「了解」との間にも成立する。先の論述から、「体験」と「表現」と「了解」との間には、「構造的」な連関があり、それぞれの内にも「構造的」特性があるということが分かった。「構造的」であるということは、そこに部分と全体との連関があって、知

情意の統一（および、それらと結びつく他の三つ組の統一）がある、ということである。「了解」が「構造的」特性を持ち、階層を形成する、ということは、具体的にはどのような事態を表示しているのであろうか。これに関しては、ディルタイ自身明確に論じていないが、その思想を発展させれば、以下のように論ずることができる。

ディルタイの思想に従い、「了解」論を発展させた場合、「相互作用」という舞台における「了解」が問題となる。「相互作用」とは、自己が外界に対して働きかけると同時に、外界が自己に働き返すことを示し、そこでは、「表現」と「了解」が重要な位置を占めるが、本論文では「了解」のみを扱う。[10]「相互作用」という舞台の上で「了解」はいかに作用しているか。たとえば、読書について考察しよう。書物を読み、その中に内的なものを把握するためには、机、いす、ライト、ペン、紙、部屋、家などの把握がすでになされて、それらの意味の階層が内体の内に形成されていなければならない。読書における「高次の了解」が可能となるためには、「基本的了解」が前提されていなければならない。その階層については、ディルタイは「客観的精神」に関する記述の内にその断片を残している。「客観的精神という領域は、生活様式、交際の形式から、社会が定めた諸目的の連関、つまり習俗、法律、国家、宗教、芸術、科学、哲学にまでおよぶ。」(VII, 208)「子供は話すことも知らないうちに、すでに共同性を伝えるものの中に全くはまりこんでいる。また、子供が身振りと表情、動作と感嘆、言葉と文章などを了解することを学ぶのも、まさにそれらが彼にいつも同じものとして現われ、また、それらが意味し表現するものとの関連もいつも同じものとして現われるからである。こうして、個人は客観的精神の世界に位置づけられる。」(VII, 208f.)[11]

次に、ハンマーを例に、「了解」の「構造的」特性について考察する。ハンマーを使用する際、そこに我々は深遠な哲学を求めたりすることはないだろう。使用する目的のもとに、ハンマーの性質や使用法を我々は「了解」するのである。ハイデッガーが『存在と時間』で見事に示しているように、「了解」は受動的な作用ではなく、能動的で主体の側の要求に基づいている。つまり、対象のあるがままを把握するのではなく、対象にこめられた内的なもの（たとえば、「有意義性」Bedeutsamkeit）を主体の「了解」の要求度に応じて「了解」するのである。主体には、常に「了解」の前提となる要求（「了解」の目的・意図）が存在し、その要求を満たすように「了解」が行われる。また、「了解」には必ず感情が伴う。「価値感情のない了解はない」(V, 336) と述べられているように、「了解」する対象への快・不快、喜び・悲しみ、満足・不満等が必ず「了解」に含まれている。さらに、形式的な「了解」概念を論じた際に、外→内への動きとして「了解」は規定された。このことは、「了解」が「対象把握」という事実的なものの把握を行うことを示している。つまり、「了解」は現実と関わる。対象がいかなる形をとり、いかなる色をなし、いかなる配置にあるか…、という箇所から「了解」は出発する。そのような対象のあり方を抽象化して得られた関係が、先に述べた◎から③までの「了解」の形式になると考えられる。

これまで述べてきた「了解」の「構造的」特性と階層性の記述か

ら、「相互作用」について、次のことが分かる。つまり、「相互作用」という概念で顕在化することは、主体の「体験」と客体の「表現」の「了解」という場には、何層にもわたる階層が現われる、ということである。しかも、その階層は、「構造的」な性質を持つ。「相互作用」とは、結局、「了解」の層を形成する種々の「構造的」な関係と言うことができよう。従って、「了解」が行われているすべての段階で、知情意に基づく統一体形成活動が起こっていることになる。

以上の考察から分るように、「了解」と「構造連関」との関わりは、「構造連関」が「了解」の根拠となるとともに、「了解」の内容にも関連してくる、ということである。「了解」の根拠に「構造連関」が関わり、その場合の「了解」が表面化する時、「了解」の認識論が現われ、また、「了解」の作用の内容として「構造連関」が関係し、その場合の「了解」が表面化する時、「了解」の存在論が問題となると考えられる。ハイデッガーは、ディルタイの本来の哲学的傾向が「生」の存在論にあると『存在と時間』(第49節の注1)でみなしていたが、以上考察してきたように、「了解」の認識論と「了解」の存在論との関係は、一方を単純化して他方に解消しうるというものではない。両者の内的連関は、ディルタイにおける根本的な諸傾向から把握されなければならない。本論文は、その序論を述べたにとどまり、その課題は今後に待たなければならないが、ただし、少なくとも冒頭に示した、「了解」の二重性の理由の一つに、このような「了解」と「構造連関」との二重の関係、すなわち、根拠に関わるとともに内容にも関連するという関係によると考えられる。

注

本稿で使用した全集は次のものである。

WILHELM DILTHEY GESAMMELTE SCHRIFTEN, 6. Aufl., Stuttgart: B. G. Teubner 1958.

なお、全集からの引用は次のように表記した。

例、V, 320.

これは、全集第五巻320ページを意味する。

(1) 拙論、「精神諸科学におけるディルタイの『了解』概念」、哲学・思想論叢、第二号、一九八四年参照。

(2) 荒井武、「ディルタイ研究」、山形大学紀要(人文科学)、第三巻第一号、24頁参照。

(3) 拙論、前掲論文、50頁参照。

(4) cf., J. Piaget, La psychologie de l'intelligence, Paris: Armand Colin 1957, p. 14〜p. 15.

(5) cf., F. Rodi, Morphologie und Hermeneutik, W. Kohlhammer 1969, S. 43.

(6) cf., VII, 51.

(7) cf., V, 206, 210.

(8) cf., V, 214.

(9) cf., V, 205, 216

(10) 拙論、前掲論文、注(1)参照。

(11) さらに、「この了解は、子供の片言の了解から、ハムレットや理性批判の了解に至るまでおよぶ。石、大理石、音楽としてつくられた響きから、態度、言葉と書物から、行為、経済秩序そして制度から、同じ人間精神が我々に語りかけ、その解釈を要求している」(V, 318f.) と述べられている。

(もりもと・つかさ筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)